論文

古代語における「ツ・ヌ」のアスペクト的意味とアスペクト的位置付け

―『竹取物語』を中心に―*

広島大学大学院

魏　　榕

要　旨

本稿は、古代語の「ツ・ヌ」のアスペクト的意味とアスペクト的位置付けを検討したものである。『竹取物語』を中心にする中古物語に対する調査に基づき、「ツ・ヌ」の前接動詞の違いを明確にした上で、「ツ・ヌ」が事態の〈完了〉と〈発生〉という局面的意味を表すものであることを明らかにした。さらに、「ツ・ヌ」のアスペクト的意味を踏まえて、「ツ・ヌ」のアスペクト的位置付けを再検討し、「ツ・ヌ」を「局面的アスペクト」に位置付けた。

キーワード：「ツ・ヌ」、局面的アスペクト、完成相

1. はじめに

学校文法では、「ツ・ヌ」は、事態の〈完了〉を表す「完了の助動詞」と呼ばれる。だが、アスペクト論の発達につれて、アスペクトの観点から「ツ・ヌ」の意味を解釈する研究が多くなる。「ツ・ヌ」は、事態の時間的構成を表す、アスペクト的標識として見なされるようになる。その中で、「完成相・非完成相」という現代語におけるアスペクトの二項対立説を古代語[1)]にも適用させ、「ツ・ヌ」を古代語の完成相標識として理解する研究が見られる（鈴木2009）。この見方に従えば、「ツ・ヌ」は、アスペクトの体系の中で、現代語の完成相「φ」[2)]と同じものとして位置付けられ、外的視点から事態の「ひとまとまり性」（即ち事態の全体）

---

* 本稿は、第53回西日本言語学会において「古代語における完成相標識「ツ・ヌ」のアスペクト的意味」と題して口頭発表したものに加筆・訂正したものである。本稿を完成するに当たって、広島大学人間社会科学研究科の上野貴史教授と査読者の方々から貴重な教示を頂いた。ここに謹んで謝意を表したい。

1) 本稿で言う「古代語」は、平安時期、即ち中古時期の日本語を指す。

2) 現代語の「完成相」と「非完成相」との文法的アスペクトの対立の形式的表示については諸説ある。工藤（1995）は、テンスとアスペクトとを関連させて、非過去の場合では、「完成相」と「非完成相」との対立は「スル（無標の動詞基本形「φ」）」と「シテイル」により表示され、過去の場合では、「シタ」と「シテイタ」により表示されると指摘している。本稿では、「タ」を過去時標識として考えて、過去時と非過去時の何れも、現代日本語の完成相標識を「φ」と考えることにする。

©2024　西日本言語学会

を捉える文法的アスペクトとなる。

だが、「ツ・ヌ」は、必ずしも古代語の完成相標識であるとは限らない。その理由は、「ツ・ヌ」が状態述語にも承接でき、「状態」の〈発生〉と〈完了〉[3]というアスペクト的意味も表し得ることにある。状態述語は、「完成相」と「非完成相」の何れでもないので、状態述語にも承接する「ツ・ヌ」は、「完成相」ではないであろう。その具体例を(1)に示す。

(1) a.「さも苦しげに思したりつるかな。泉川の舟渡りも、まことに、今日は、いと恐ろしくこそありつれ。この二月には、水の少なかりしかばよかりしなりけり」

（『源氏物語』「宿木」）

b. 精進物なければ、午時より後に、楫取の昨日釣りたりし鯛に、銭なければ、米をとりかけて、落ちられぬ。かかること、なほありぬ。楫取、また鯛持て来たり。

（『土佐日記』）

(1a)下線部の「ツ（つれ）」は、存在の意味を表す「状態動詞」の「あり」に承接し、過去のある時点において完了した状態を表している。つまり、今日は、恐れる状態にあったが、発話時に、そのような状態は既に完了した（恐れなくなった）という意味を示している。また、(1b)の下線部の「ヌ（ぬる）」も、「状態動詞」の「あり」に承接して、「楫取は、鯛と米を混ぜて、精進落としの料理を作り、このようなことは、その後もよくある」という状態の〈発生〉を表している。もし、「ツ・ヌ」が古代語の完成相標識であれば、(1)のような、状態述語に承接する「ツ・ヌ」は存在するはずがないであろう。

以上のことを踏まえると、古代語の「ツ・ヌ」を「完成相」に位置付ける見方は妥当とは言えないと思われる。このことから、「ツ・ヌ」のアスペクト的意味を再検討した上で、「ツ・ヌ」のアスペクト的位置付けを説明することが本稿の目的となる。なお、本稿の構成は、以下の通りである。第2節では、「ツ・ヌ」に関する先行研究を検討し、第3節では、『竹取物語』に見られる「ツ・ヌ」のアスペクト的意味を考察する。第4節では、「ツ・ヌ」の古代語のアスペクト体系における位置付けを検討する。

2. 先行研究

「ツ・ヌ」の研究は江戸時代まで遡る。その研究を網羅することは難しいが、以下では、「ツ・

[3] 事態の〈発生〉と〈完了〉は、先行研究では、異なった用語により表示されている。例えば、工藤(1995)は、成立（開始）、展開、消滅（終了）で動作の各局面を表している。さらに、工藤(2014)は、成立（開始）を〈開始限界達成〉、消滅（終了）を〈終了限界達成〉と呼んでいる。それに対し、中西(1957)と井島(2011)は、〈発生〉と〈完了〉を用いているが、本稿では、この〈発生〉と〈完了〉という用語を用いることにする。

ヌ」の研究の中で特に重要な研究に絞って検討する。

井島(2011)で指摘されているように、「ツ・ヌ」の相違に最初に注目した研究者は、本居宣長であろう。本居宣長は、1792年の著作『玉霰』では、「ツ・ヌ」の前接動詞が異なるという事実を指摘している。その後、江戸時代から近代までの研究の多くは本居宣長が指摘した事実を踏まえて、前接動詞の意味的特徴から「ツ・ヌ」の相違を説明している。「ヌ」は自動詞に承接し、「ツ」は他動詞に承接するという見解は、「ツ・ヌ」の研究史においてかなりの影響力があった。

本居宣長の研究を受け継ぎ、前接動詞の意味的特徴で「ツ・ヌ」の使い分けを研究するものが多く見られるが、アスペクト論が発達した後では、「ツ・ヌ」のアスペクト的意味の違いを研究するものも次第に多くなる。例えば、中西(1957)では、「ヌ」は状態の〈発生〉を表すものであるのに対し、「ツ」は動作の〈完了〉を表すものであるとされている。中西(1957)が指摘した「ヌは状態の〈発生〉、ツは動作の〈完了〉」とする説は、部分的には事実に合い、井島(2011)といった近年の「ツ・ヌ」に関する研究にも依然として影響を及ぼしている。

「ツ・ヌ」に関する近年の研究において、鈴木(2002)では、「ヌ」は「変化動詞(客体の変化を表す限界的動詞)」に承接し、発話時以降における事態の〈完了〉を表すのに対し、「ツ」は「動作動詞(主体の動作を表す非限界的動詞)」に承接し、発話時以前における事態の〈完了〉を表すと指摘されている。この指摘に基づき、鈴木(2009)は、「ツ・ヌ」が「発話時以前・以降の一括性、または、限界到達性」を表す、古代語の完成相標識であり、そのアスペクト的意味の違いが前接動詞により異なることも指摘している。鈴木(2009)の見方は、工藤(1995)で指摘されている現代語の完成相のアスペクト的意味(「ひとまとまり性」と「限界達成性」)に基づくものである。その見方には、以下の問題点がある。もし、古代語の「ツ・ヌ」を完成相標識として理解すると、「ツ・ヌ」は、現代語の完成相と同じように、状態述語の場合では起こらないはずであろう。だが、鈴木(2009)の指摘によると、「ツ・ヌ」は状態述語に承接することがあり、その場合では、「一括性(ひとまとまり性)」を表し得る。もし鈴木(2009)の見方に従い、「ツ・ヌ」を古代語の「完成相」標識に位置付けると、なぜ同じ完成相であるのに、古代語の完成相が状態述語に承接できるのに対し、現代語の完成相が状態述語の場合では起こらないのか、ということが問題となる。「完成相」自体の意味には変化がないということを前提とすると、その原因は、「状態」に対する、古代と現代の捉え方が変化したという結論となる。だが、「状態」は、古代と現代の何れの時代においても、その時間的意味には変化がなく、それに対する捉え方(アスペクト)にも変化がないと予想できる。このことから、「ツ・ヌ」を古代語の「完成相」標識に位置付けると、解釈し難い問題が生じる。これとは異なり、「ツ・ヌ」を他のアスペクトに位置付けると、「完成相」ではない「ツ・ヌ」が状態述語に承接できることが可能となるであろう。

また、井島(2011)は『源氏物語』に対する文献学的調査を行った上で、「ツ・ヌ」のアス

ペクト的意味を詳しく論じている。井島(2011)によると、「ヌ」は動作の〈発生〉を表すのに対し、「ツ」は動作の〈完了〉を表すものである。ただし、前接動詞は「変化・瞬間動詞（瞬間的変化動詞)」[4]の場合には、「ツ」は用いられず、「ヌ」は変化の〈発生〉と〈完了〉を共に表す。また、「ツ・ヌ」は、現代語の完成相と異なり、状態述語にも承接できる。状態述語にも承接する場合では、「ヌ」は状態の〈発生〉を表し,「ツ」は状態の〈完了〉を表す。とりわけ状態述語に承接する「ツ・ヌ」については、井島(2011)は、テンスの意味が強く見られるという主張を認めず、それもアスペクト表現であることを主張している。だが、井島(2011)の指摘には、検討の必要があるところも見られる。例えば、なぜ同じ完成相であるのに、古代語の完成相が状態述語に承接できるのに対し、現代語の完成相が状態述語の場合では起こらないのかという問題に対し、井島(2011)は、その原因が古代語のアスペクトが「事態アスペクト」であるのに対し、現代語のアスペクトが「動作アスペクト」[5]であると主張している。この井島(2011)の「動作アスペクト」と「事態アスペクト」という定義は、Smith(1997)で指摘されている「語彙的アスペクト」と「文法的アスペクト」と類似する。アスペクトは、単なる「動作」の内的時間構成を表すものではなく、「動作」を含む事態の時間的構成を表す文法的カテゴリーである。アスペクトの分類は、事態と動作との違いによるのではなく、事態の語彙的意味に内在する時間的意味を表すか、或いは、外的視点から事態の内的時間構成を捉えるか、という視点の存否によるものであると思われる。つまり、「ツ・ヌ」を、現代語と同じような「完成相」に位置付けると、同じ完成相であるのに、何故古代語の完成相が状態述語に承接できるのに対し、現代語の完成相が状態述語の場合には起こらないのかという問題が生じ、「古代人と現代人では、アスペクト範疇により表示される時間的意味に対する認識が異なる」ということになる。この点では、井島(2011)と鈴木(2009)の考えは共通している。だが、「時間認識の変化」は、抽象的、思惟上の問題であり、言語自体で証明する方法がないと思われる。ここまでの各学説の主張をまとめると、表1となる。

---

[4] 井島(2011)で指摘されている「変化・瞬間動詞」は、そもそも〈発生〉と〈完了〉の何れもない動詞であろう。例えば、「死ぬ」という瞬間的変化において、「死ぬ」の進行状態は見られず、「死ぬ」の〈発生〉と〈完了〉は同時に現れるものである。つまり、「変化・瞬間動詞」は Vendler(1957)で指摘されている「到達（achievement)」と同じものであり、変化の限界点として理解しても良いと思われる。このように考えると、「変化・瞬間動詞」に承接する「ヌ」は、変化の〈発生〉を表すものではなく、変化の限界点に到達したというアスペクト的意味を表すものである。

[5] 井島(2011)の定義に従うと、「動作アスペクト」とは、動詞の語彙的意味に内在するアスペクト的意味であり、「事態アスペクト」とは、動詞語彙の外部（話者の視点として理解してもよいであろう）から見る、事態に対する時間的認識である。

表１　「ツ・ヌ」のアスペクト的意味とアスペクトの位置付けに対する各学説の主張

	「ツ・ヌ」のアスペクト的意味	「ツ・ヌ」の位置付け
中西（1957）	ヌは状態の〈発生〉、ツは動作の〈完了〉	明言していない
鈴木（2009）	発話時以前（ヌ）・以降（ツ）の一括性、または、限界到達性	完成相
井島（2011）	ヌは動作の〈発生〉、ツは動作の〈完了〉	完成相

状態述語が「完成相」と「非完成相」の何れでもないということを前提とすると、古代語の「ツ･ヌ」は、状態述語に承接できるので、「完成相」ではない可能性がある。もし、「ツ･ヌ」が「完成相」ではないとすると、事態の「ひとまとまり」を捉えるという「完成相」の意味も表し得ないことが推測できる。このことを前提として、次節以降では、各種の動詞に承接する「ツ・ヌ」の意味を再検討した上で、「ツ・ヌ」のアスペクト的位置付けを考察していくことにする。

3.『竹取物語』における「ツ・ヌ」の考察

第２節で指摘した問題意識に基づき、本節では、『竹取物語』における「ツ・ヌ」の使い分けを考察する。『竹取物語』を考察対象にする理由は、和歌集と異なり、中古物語は具体的な現場性に富み、言語の実態をよく反映できるからである。とりわけ鈴木(2009)と井島(2011)は、『源氏物語』の全文を考察し、各自の学説をまとめている。『源氏物語』に対する考察は既に充分であると言えるが、古代語を代表する中古物語は、『源氏物語』のみではないと思われる。他の中古物語に対する考察を通して、『源氏物語』による見方を検証することを念頭に、本稿は『竹取物語』を選定することにした[6]。ただし、『竹取物語』だけで考察を行うのが難しい場合は、『源氏物語』から用例を引用することにする。

また、考察の方法については、文体の違いによる影響を排除するために、地の文と会話文を別個に考察する[7]。また、考察の範囲については、文末終止形の「ツ･ヌ」のみならず、「ツ･ヌ」の活用形も含むことにする。考察の観点は、主に「ツ・ヌ」の前接動詞の種類と、「ツ・ヌ」と他の助動詞との承接である。

---

[6] 『源氏物語』では、「ツ・ヌ」の用例はそれぞれ約1500と3200という数に達する（「ツ・ヌ」の各種の活用型を含む）。量的にはやや膨大な状態にあるので、先行研究では、『源氏物語』を考察する場合は、通常は一部分の章段を取り出して考察される。一部分の章段を取り出すという考察方法は、基本的には客観的な方法であると言えるが、取り出しの部分には分量の差異があり、また、どの部分を取り出すかという問題には、研究者の恣意性による影響をすべて排除することができない。そのため、全文考察の方法はより客観的であると考える。

[7] 手紙の文は会話文と見る。

また、前接動詞により「ツ・ヌ」のアスペクト的意味が異なるので、奥田(1977)、工藤(1995)、井島(2011)といった先行研究を踏まえて、本稿では、動詞を「動作動詞」、「変化動詞」、「主体動作客体変化動詞」、「状態動詞」、「思想動詞」に分類する。各種類の動詞の時間的意味については、「見る、歩く、申す」のような「動作動詞」は、通常は動作主項の意志的且つ非限界的動作を表す持続的動詞であるため、[+ 持続性] [- 限界性] [+ 動作性] [+ 意志性] の時間的意味を有する。「参る、開く、入る」のような「変化動詞」は、対象項の受動的変化を表し、明らかな結果変化も見られるので、[+ 限界性] [+ 動作性] の時間的意味を有する。さらに、「変化動詞」には、持続的なものと瞬間的なものがある。「参る」のような「持続的変化動詞」は、[+ 持続性] [+ 限界性] [+ 動作性] の時間的意味を有する。それに対し、「死ぬ、開く」のような「瞬間的変化動詞」は、[- 持続性] [+ 限界性] [+ 動作性] の時間的意味を有する。ただし、「変化動詞」には、「夜が明ける、林檎が落ちる」のような [- 意志性] のものもあれば、「私が行く、彼が来る」のような [+ 意志性] のものもある。また、「取る、殺す」のような「主体動作客体変化動詞」は、二側面の時間的意味を有し、動作主項の意志的動作を強調する場合では、[+ 持続性] [- 限界性] [+ 動作性] [+ 意志性] の時間的意味を表し、受動者項の受動的変化を強調する場合では、[+ 持続性] [+ 限界性] [+ 動作性] [- 意志性] を表す。「あり、おわす、美し」のような「状態動詞」「思想動詞」と「形容詞」により表示される状態述語は、対象項の単なる状態を表すので、[+ 持続性] [- 限界性] [- 動作性] [- 意志性] の時間的意味を有する。最後に、「思ふ」のような「思想動詞」は動作主項の意志的思想・情感を表すが、思想・情感には動作性がないので、[+ 持続性] [- 限界性] [- 動作性] [+ 意志性] の時間的意味を有する。「状態動詞」と「思想動詞」は、同じ時間的意味を表し得るが、「状態動詞」は、非意志的状態を表し、「思想動詞」は、意志的思想・情感を表すので、両者は、意志性の有無により異なる。各動詞の素性をまとめてみると、表 2 となる。

表 2　各動詞の素性[8)]

	動作性	限界性	持続性	意志性
動作動詞	+	-	+	+
変化動詞（持続的）	+	+	+	+/-
変化動詞（瞬間的）	+	+	-	+/-
主体動作客体変化動詞	+	+/-	+	+/-
状態動詞	-	-	+	-
思想動詞	-	-	+	+
形容詞	-	-	+	-

8) 表2では、「変化動詞」には「意志性」を有するものと、「意志性」を有しないものが両方あるので、「変化動詞」の「意志性」が「+/-」となる。また、「主体動作客体変化動詞」は、動作主項の動作を強調する場合では「意志的」且つ「非限界的」となり、受動者項の変化を強調する場合では「非意志的」且つ「限界的」となるので、その「限界性」と「意志性」が「+/-」となる。

以上の動詞分類に基づき、『竹取物語』における「ツ・ヌ」の前接動詞とその頻度を表3と表4に示す。

表3-a 『竹取物語』の会話文における「ツ」の前接動詞

	ツ	割合	具体例
動作動詞	3	12.0%	申す、宣わせる、見る
変化動詞	3	12.0%	参る、来
主体動作客体変化動詞	9	36.0%	遣わす、取る…
状態動詞	3	12.0%	あり、います、おはす
思想動詞	5	20.0%	思ふ、思ひ召す…
形容詞	2	8.0%	なし
延べ語数	25	100%	

表3-b 『竹取物語』の地の文における「ツ」の前接動詞

	ツ	割合	具体例
動作動詞	0	0%	
変化動詞	0	0%	
主体動作客体変化動詞	19	82.6%	かづく、殺す、流す…
状態動詞	1	4.3%	あり
思想動詞	2	8.7%	思ふ、思ひ侘ぶ
形容詞	1	4.3%	うつくし
延べ語数	23	100%	

表4-a 『竹取物語』の会話文における「ヌ」の前接動詞

	ヌ	割合	具体例
動作動詞	0	0%	
変化動詞	45	83.3%	知る、開く、入る、なり…
主体動作客体変化動詞	2	3.7%	忘る、率る
状態動詞	5	9.3%	御座します、います…
思想動詞	2	1.9%	思ふ、思しめしとどむ
形容詞	0	0%	
延べ語数	54	100%	

表 4 -b 『竹取物語』の地の文における「ヌ」の前接動詞

	ヌ	割合	具体例
動作動詞	0	0%	
変化動詞	52	96.2%	逃げ失す、漕ぎ帰る、開く…
主体動作客体変化動詞	0	0%	
状態動詞	1	1.9%	あり
思想動詞	1	1.9%	心惑ふ
形容詞	0	0%	
延べ語数	54	100%	

表 3 と表 4 のデータを見ると、『竹取物語』では、地の文と会話文との文体の違いにより、「ツ・ヌ」の前接動詞の傾向はやや異なる[9]。だが、「ツ」の前接動詞には、「主体動作客体変化動詞」が最も多いのに対し、「ヌ」の前接動詞には、「変化動詞」が最も多いということは、地の文と会話の文の何れでも共通している。具体的に言うと、108例の「ヌ」では、「変化動詞」に前接するものは、会話文では83.3%、地の文では96.2% を占める。「変化動詞」が客観的存在の非意志的変化を表すものであるため、「ヌ」は、基本的には非意志的述語に承接することは明らかである。それに対し、48例の「ツ」では、「主体動作客体変化動詞」に前接するものは、会話文では36.0%、地の文では82.6% を占める。「主体動作客体変化動詞」が動作主の意志的動作が客観的存在に対する変化と影響を表す意志的他動詞であるため、「ツ」は、基本的には意志的述語に承接することは明らかである。この事実は多くの先行研究でも指摘されている。例えば、時枝(2020: 473、475)には、「『ツ』は作為的、瞬間的な性質の事柄に用ゐられる。『ヌ』は自然的、経験的な性質の事柄に用ゐられる」という指摘がある。以下では、前接動詞による「ツ・ヌ」の使い分けを検討する。

3.1 動態述語[10]に承接する「ツ・ヌ」の時間的意味

まず、『竹取物語』には、「動作動詞（[+ 持続性] [- 限界性] [+ 動作性] [+ 意志性]）」に承接する「ツ・ヌ」が少ない。

(2) a. 帝仰せたまはく、「みやつこまろが家は山もと近かなり。御狩の御幸したまはむやうにて、見てむや」とのたまはす。みやつこまろが申すやう、「いとよきことなり。な

[9] 具体的には、「主体動作客体変化動詞」を除き、会話文では、「動作動詞」「変化動詞」に承接する「ツ」は見られるが、地の文では見られない。また、会話文では、「状態動詞」「思想動詞」「形容詞」に承接する「ツ」は、地の文のそれよりやや多く見られる。さらに、「ヌ」について言えば、「変化動詞」を除き、会話文では、「主体動作客体変化動詞」「状態動詞」「思想動詞」に承接する「ヌ」は、地の文のそれよりやや多く見られる。会話文と地の文の何れにおいても、「動作動詞」と「形容詞」に承接する「ヌ」は見られない。

[10] 「動態述語」は、「動作動詞」「変化動詞（瞬間的と持続的）」と「主体動作客体変化動詞」を指す。

にか。心もとなくてはべらむに、ふと御幸して御覧ぜば、御覧ぜられなむ」と奏すれば、帝、にはかに日を定めて御狩にいでたまうて、かぐや姫の家に入りたまうて、見たまふに、光満ちてけうらにてゐたる人あり。

（『竹取物語』帝、狩をよそおい、かぐや姫に会いに行く）

b. かぐや姫「親たちのかへりみを、いささかだに仕うまつらでまからむ道もやすくもあるまじきに、日ごろも、いでゐて、今年ばかりの暇を申しつれど、さらにゆるされぬによりてなむ、かく思ひ嘆きはべる。…」

（『竹取物語』迎えの天人来たり、かぐや姫昇天）

『竹取物語』には、有生物主語の意志的動作を表す「動作動詞」に承接する「ヌ」は極稀であり、(2a)の例のみ見られる[11]。有生物主語の意志的動作を表す「動作動詞」に承接する「ツ」は、3例あるが、その一例を(2b)に示す。(2a)と(2b)においては、「ツ・ヌ」は共に「動作動詞」の「御覧ず・申す」に承接しているが、(2a)の文脈の意味について、帝は、狩猟の名義で山の麓にある竹取の翁の家に行き、かぐや姫が見える可能性について、竹取の翁に聞き、帝の質問への答えとして、竹取の翁は「急に行幸なさってご覧になったなら、ご覧になることができましょう」（小学館古典文学全集・『竹取物語』p.60）[12]と言った。下線部の「御覧ぜられなむ」は、帝による動作（ご覧になる）の実現の可能性を表している。その動作性は、助動詞「らる」により表示される「可能」の意味により解消され、「御覧ぜられ」は、動作述語というより、むしろ状態述語である。本稿では、この例を、「動作動詞」に承接する「ヌ」に関するものから排除することから、『竹取物語』には「動作動詞」に承接する「ヌ」は実際には見られないということになる。(2b)下線部の「申す」という「動作動詞」は、動作主であるかぐや姫の意図を含む。この「申しつれど」は、「かぐや姫は自分の希望を月の国の大王に伝えた」という意味を表すので、意志的遂行動作の〈完了〉を表している。(2)を見ると、「動作動詞」に承接する「ヌ」はほぼ見られず、「動作動詞」に承接する「ツ」は動作の〈完了〉を表すと思われる。

また、「変化動詞（[+ 限界性][+ 動作性]）[13]」について言えば、「変化動詞」に承接する「ツ」は3例のみ見られるのに対し、「変化動詞」に承接する「ヌ」は97例見られる。しかも、「変化動詞」に承接する「ツ」と関わる僅かの例には、「参る、来」といった移動の意味を表す「持続的変化動詞（[+ 持続性][+ 限界性][+ 動作性]）」の例が多い。それに対し、「知る、入る」のような「瞬間的変化動詞（[- 持続性][+ 限界性][+ 動作性]）」には、「ヌ」のみが承接で

[11] 他には、無生物主語の動作を表す「動作動詞」に承接する「ヌ」が若干例あるが、無生物主語の動作は、「動作」と言うより、客観的現象（状態）と言うほうが適当である。本稿は、無生物主語の動作を表すものを「動作動詞」から排除する。

[12] 本稿では、説明がない場合に限り、古代語の現代語訳は筆者によるものである。

[13] 「変化動詞」には、[- 意志性] と [+ 意志性] のものが両方あるので、ここでは [意志性] を省略する。

きる。

(3) a. 嫗「仰せごとに、かぐや姫のかたち、優におはすなり。よく見て参るべきよし、のたまはせつるになむ、参りつる」といへば、…

（『竹取物語』帝、かぐや姫召さんとして手紙をつくす）

b. 供人「御車率て参りぬ」と、人々騒がしきこゆれば、宿直人ばかりを召し寄せて、「帰りわたらせたまはむほどに、かならず参るべし」などのたまふ。

（『源氏物語』「橋姫」）

c. 翁いふやう、「我朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて知りぬ。…」

（『竹取物語』竹取の翁の紹介とかぐや姫のおいたち）

(3)は「変化動詞」に承接する「ツ・ヌ」の例である。『竹取物語』には、「参る」に承接する「ヌ」が見られないので、『源氏物語』から例を取ることにする(3b)。(3a)と(3b)の「ツ・ヌ」は、共に「持続的変化動詞」の「参る」に承接するが、(3a)の「参りつる」は、「発話時に嫗は既に到着していた」という意味を表すので、この「ツ」は、「参る」の〈完了〉を表している。それに対し、(3b)の「参りぬ」は、「発話時に宮は出発した」の意味であるため、この「ヌ」は、「参る」の〈発生〉を表している。また、(3c)の「知る」は「瞬間的変化動詞」であり、語彙的には進行がなく、〈発生〉と〈完了〉が同時となる。つまり、「知りぬ」は、知らない状態から知った状態への瞬間的変化を表すと理解し得る。『竹取物語』には、「知りつ」のような「瞬間的変化動詞」に承接する「ツ」が見られず、また、井島(2011: 156)の指摘によると、『源氏物語』にも「瞬間的変化動詞」に承接する「ツ」が発見されていないので、「ツ」は「瞬間的変化動詞」に承接できないと言えるであろう。(3)を見ると、(3a)と(3b)のような「持続的変化動詞（参る）」の場合では、「ヌ」は変化の〈発生〉を表すのに対し、「ツ」は変化の〈完了〉を表している。それに対し、(3c)のような「瞬間的変化動詞（知る）」の場合では、「ヌ」は変化の達成を表し、「ツ」はほぼ用いられない。

「主体動作客体変化動詞」[14]は、意志的動作が対象に対する変化と影響を表す他動詞であるため、意志的述語に用いられた「ツ」は「主体動作客体変化動詞」に承接し得ると予想できる。

(4) a. 大納言、御腹ゐて、「汝ら、君の使と名を流しつ。君の仰せごとをば、いかがはそむくべき」とのたまひて…　（『竹取物語』大伴御行、龍の頸の玉を取れと命ず）

[14]「主体動作客体変化動詞」は、動作主項の動作を強調する場合では［+ 持続性］［- 限界性］［+ 動作性］［+ 意志性］、受動者項の変化を強調する場合では［+ 持続性］［+ 限界性］［+ 動作性］［- 意志性］という素性を有する。

b. 翁「我を、いかにせよとて、捨ててはのぼりたまふぞ。具して率ておはせね」と、泣きて伏せれば、御心惑ひぬ。　（『竹取物語』迎えの天人来たり、かぐや姫昇天）

c. 我が袂今日かわければわびしさの千種の数も忘られぬべしとのたまふ。

（『竹取物語』工匠の訴えにより、万事は露見）

（4a）は、「君たちは、主君の家来として、自分の名前を世間に流布した」という意味を表し、「流しつ」は、動作主項による意志的動作の〈完了〉を表している。「主体動作客体変化動詞」に承接する「ヌ」については、『竹取物語』には、僅か（4b）と（4c）の 2 例しかない。（4b）は、竹取の翁の、かぐや姫に対する命令であり、「このわしを連れて行きなさい」という意味を表す。この「率ておはせね」は、まだ実現されていない動作であるため、動作主項の意志的動作とは言い難い。それに対し、（4c）の歌における「忘られぬ」は、「らる」型で「様々な艱難辛苦を自然と忘れてしまう」という意味を表すので、対象項（艱難辛苦の事）の非意志的変化を表すと理解し得る。（4）を見ると、「主体動作客体変化動詞」に承接する場合では、「ツ」は、動作主による意志的動作の〈完了〉を表している。それに対し、「ヌ」は、基本的には「主体動作客体変化動詞」に承接せず、僅かな出現例においては、客体の非意志的変化を表すと思われる。

以上の検討を踏まえると、「ヌ」は、主に「変化動詞」に承接し、非意志的（自然的）変化の〈発生〉を表す。「動作動詞」と「主体動作客体変化動詞」に承接する「ヌ」は基本的には見られず、僅かな出現例において、「主体動作客体変化動詞」の受動態に承接し、対象項の自然的変化を表す。それに対し、「ツ」は、通常は「主体動作客体変化動詞」に承接し、動作主項による意志的動作の〈完了〉を表す。「動作動詞」に承接する「ツ」も見られるが、いずれも動作の〈完了〉を表す。「変化動詞」については、「ツ」は、「持続的変化動詞」に承接する例があり、変化の〈完了〉を表すが、「瞬間的変化動詞」に承接する例は見られない。動態述語に承接する「ツ・ヌ」の意味は、表 5 のようにまとめることができる。

表 5　動態述語に承接する「ツ・ヌ」の意味

	「ツ」の意味	「ヌ」の意味
動作動詞	意志的動作の〈完了〉	用例ほぼ無し
変化動詞（持続的）	変化の〈完了〉	変化の〈発生〉
変化動詞（瞬間的）	用例無し	変化の〈達成〉[15]
主体動作客体変化動詞	意志的動作の〈完了〉	非意志的変化の〈発生〉

[15]「死ぬ、知る」のような「瞬間的変化動詞」については、その〈発生と完了〉は、同じ瞬間に現れた、未分化の変化である（発生＝完了）。このような動詞は、変化の〈発生〉と〈完了〉の何れでもないと言える。

以上で検討した前接動詞の他に、「状態動詞」「思想動詞」「形容詞」という状態述語に承接する「ツ・ヌ」も見られる。状態述語に承接する「ツ・ヌ」の時間的意味については、第3.2節で考察する。

3.2　状態述語[16]に承接する「ツ・ヌ」の時間的意味

第1節で述べたように、現代語においては、状態述語の無標形式「φ」は「完成相」の意味を表し得ない。もし古代語の「ツ・ヌ」を、現代語の「φ」と同じように、完成相として理解すると、状態述語に承接する場合では、アスペクト的意味も表し得ないと推論できる。だが、『竹取物語』には、状態述語に承接する、アスペクト的意味を表す「ツ・ヌ」が12例見られ、その3例を(5)に示す。

(5) a. たけとりの翁、竹を取るに、この子を見つけて後に竹取るに、節をへだてて、よごとに、黄金ある竹を見つくることかさなりぬ。
（『竹取物語』竹取の翁の紹介とかぐや姫のおいたち）

b. かぐや姫の心ゆきはてて、ありつる歌の返し、まことかと聞きて見つれば言の葉をかざれる玉の枝にぞありけるといひて、玉の枝も返しつ。
（『竹取物語』工匠の訴えにより、万事は露見）

c. 使はるる人も、年ごろ慣らひて、立ち別れなむことを、心ばへなどあてやかにうつくしかりつることを見慣らひて、恋しからむことの堪へがたく、湯水飲まれず、同じ心に嘆かしがりけり。　（『竹取物語』帝、竹取の翁に使いを出し昇天を確かめる）

(5)における「ツ・ヌ」は、それぞれ「かさなり、あり、うつくし」という状態述語に承接する。状態述語に承接する「ツ・ヌ」のアスペクト的意味については諸説ある。鈴木(2009: 264)では、状態述語に承接する「ツ」は、「状態の持続を一つの事実として一括的に表しているということができる」と指摘されている。それに対し、状態述語に承接する「ヌ」は、「状態の発生」と「現在における状態の継続」のいずれの意味も表し得ると指摘されている（鈴木2009: 271)。「現在における状態の継続」も表し得るので、状態述語に承接する「ヌ」は、古代語の非完成相標識[17]との対立が中和する。状態述語に承接する「ヌ」と状態述語の「φ」

---

[16] 「状態述語」は、「状態動詞」「思想動詞」「形容詞」を指す。

[17] 鈴木(2009)は、「ツ・ヌ（完成相)」と「φ（非完成相)」と「タリ・リ（パーフェクト)」という古代語における文法的アスペクトの三項対立を主張している。だが、前接動詞により、「φ」は、完成相と非完成相のいずれでも表し得ることがある。このように考えると、「φ」は古代語の非完成相標識ではなく、「中立相」(高山・青木2010)と呼ぶほうがよいと思われる。本稿の4.2で述べたように、古代語には、現代語の「シテイル」のような広汎的非完成相標識が見られず、「φ」と「タリ」の何れも、一部のみの述語の非完成相を表す。

との対立は、一人称に用いられる場合に限っては成立するとも指摘されている。もし、この鈴木(2009)の見方に従えば、状態述語に承接する「ツ」は、状態の「一括性」を表す完成相標識である。それに対し、「ヌ」は、一人称主語の場合に限っては、状態の〈発生〉というアスペクト的意味を表し、一人称主語以外の場合では、状態の〈継続〉を表すので、完成相標識ではないことになる。

これに対し、井島(2011: 162-163)では、状態述語に承接する「ツ・ヌ」のアスペクト的意味について、「状態的な事態の発生が表現される（ヌ）のは、そのような状態が実現していない（非実現）段階で、そのような状態が実現した場合を想定する場合にふさわしい。それに対し、状態的な事態の〈完了〉が表現される（ツ）のは、最前まではそのような状態であった（実現）ものが、現実にそのような状態ではなくなってしまった場合にふさわしい」と指摘されている。つまり、状態述語に承接する「ヌ」は、状態の不在から状態の存在への変化、即ち、状態の〈発生〉を表し、「ツ」は、状態の存在から状態の不在への変化、即ち、状態の〈完了〉を表すと考えられている。

具体例から見ると、(5a)は、「竹取の翁がかぐや姫を発見した後で、黄金の竹を見つけることはよくある」という意味を表し、この「かさなりぬ」は、「黄金ある竹を見つけることがよくある」という状態の「ひとまとまり性」を表さず、むしろ、状態の〈発生〉（その時から、黄金ある竹を見つけることがある）を表している。一方、(5b)は、「かぐや姫の心はすっかり晴れて、先刻の皇子の返歌として、まことかと…（ほんとうの玉の枝かと思い、皇子の話をよく聞き、また、玉の枝をよく見ましたところが、金の葉ならぬ、言の葉で飾りたてた偽りの玉の枝でございましたよ）」（小学館古典文学全集・『竹取物語』p.35）という意味を表している。この「ありつる」は、「皇子がさっき読み終わった歌」、即ち動作の〈完了〉という局面的意味を表している。また、(5c)は、「（かぐや姫が即に月に戻るということを聞いて）、使用人は、高貴で美しいかぐや姫を見慣れているので、今別れると悲しくなる」という意味を表し、この「うつくしかりつる」は、「かぐや姫の美しさはもうすぐ使用人の目の前から消える」という状態の〈完了〉を表している。(5)を見ると、状態述語に承接する「ツ・ヌ」はそれぞれ状態の〈発生〉と〈完了〉を表し、状態の「一括性」を表すものではない。状態は、動作と変化という事態と比べると、〈発生〉と〈完了〉の限界点が曖昧であるため、状態を「ひとまとまり」のものとして捉えることは難しい。このように考えると、「ヌ」は状態の〈生起（発生）〉を表し、「ツ」は状態の〈消失（完了）〉を表すという井島(2011)の見方は事実に合うと思われる。

また、「思想動詞（[+ 持続性] [- 限界性] [- 動作性] [- 意志性]）」も状態述語である。「思想動詞」は、工藤(1995: 89)では、「内的情態動詞」と呼ばれている。現代語においては、「思想動詞」の無標形式「ϕ」では、単純に完成相の意味を表すのみならず、主語の人称性・モダリティ性にも制約される。陳述法(indicative)の場合においては、「思想動詞」に承接する

「ツ・ヌ」は、一人称のみの内的思想・感情の〈発生〉と〈完了〉を表す。ただし、陳述法以外の場合では、人称の制限は緩やかになる。例えば、

(6) a. 翁を呼びとりていふやう、「まこと蓬莱の木かとこそ思ひつれ。かくあさましきそらごとにてありければ、はや返したまへ」といへば…

(『竹取物語』工匠の訴えにより、万事は露見)

b. 世の中に見えぬ皮衣のさまなれば、これをと思ひたまひね。人ないたくわびさせたてまつらせたまひそ」といひて、呼び据ゑたてまつれり。

(『竹取物語』火鼠の皮衣、あっけなく燃える)

(6a)は、「私(かぐや姫)は、嘗てこれを真の蓬莱の木だと思った。(今は、そのように思わない)」の意味を表している。この「思ひつれ」は、一人称主語の思想・感情の〈完了〉を表している。(6b)は、陳述文ではなく、竹取の翁からかぐや姫に対する命令文であるため、「思ひたまひね」の主語は二人称である。この「思ひたまひね」は、「現時点では、この皮衣が真の物だと考えていなくても、今からそのようにお考えなさい」(小学館古典文学全集・『竹取物語』p.35)ということを表すので、主語の思想・感情の〈発生〉を表すものであると理解し得る。「思想動詞」に承接する「ツ」は思想・感情の〈完了〉を表すのに対し、「ヌ」は思想・感情の〈発生〉を表すという井島(2011: 210)の指摘は(6)と合致していると思われる。

これらの状態述語を加えて、各種類の動詞に承接する「ツ・ヌ」のアスペクト的意味を示したものが表6となる。

表6　状態述語と動態述語に承接する「ツ・ヌ」のアスペクト的意味

述語類型	動詞種類	「ツ」の意味	「ヌ」の意味
動態述語	動作動詞	意志的動作の〈完了〉	用例ほぼ無し
	変化動詞(持続的)	変化の〈完了〉	変化の〈発生〉
	変化動詞(瞬間的)	用例無し	変化の〈達成〉
	主体動作客体変化動詞	意志的動作の〈完了〉	非意志的変化の〈発生〉
状態述語	思想動詞	思想・感情の〈完了〉	思想・感情の〈発生〉
	状態動詞と形容詞	状態の〈完了〉	状態の〈発生〉

表6に基づくと、古代語における「ツ・ヌ」は、事態の「ひとまとまり性」を表すのではなく、むしろ「動作、変化、状態及び思想・感情の〈発生〉と〈完了〉を表すことが多い。しかも、「完成相」と「非完成相」のない状態述語にも承接できる。このように考えると、「ツ・ヌ」は、古代語の「完成相」標識に位置付け難く、そのアスペクト的位置付けが問題となる。

次節では、「ツ・ヌ」のアスペクト的位置付けを再検討してみる。

4.「ツ・ヌ」のアスペクト的位置付け

第3節で検討したように、主に〈発生〉と〈完了〉を表す「ツ・ヌ」は、完成相に位置付け難い。結論から言うと、「ツ・ヌ」は、〈発生〉と〈完了〉の局面を表す「局面的アスペクト」に位置付けるほうがより適当であると思われる。「局面的アスペクト」は、現代語のアスペクトに関する研究でも検討されている。例えば、寺村(1984)は、「一次的アスペクト（スルとシタ)」と「二次的アスペクト（シテ＋補助動詞)」に対して、「V1＋始める、終わる」という複合動詞の形式で事態の局面的意味を表すものを「三次的アスペクト」と呼んでいる。本稿は、寺村(1984)で指摘されている「三次的アスペクト」という用語を使用せず、事態の局面的意味を表すものを「局面的アスペクト」と呼ぶことにする[18)]。

4.1「局面的アスペクト」の定義

「局面的アスペクト」の性質を説明するために、アスペクトの分類を予め検討する必要がある。Comrie(1976: 12)の定義によると、アスペクトは、事態の内的時間構成に対する様々な捉え方である。このような定義に基づき、Comrie(1976)は、文法的形式（通常は接辞）により表示される文法的アスペクトと、語彙的形式により表示される事態の内的時間構成(aktionsart)という二種類のアスペクトを提示している。Smith(1997: 124–130)は、Comrie(1976)により提示されているアスペクトの二分類をより明確に説明している。具体的に言うと、事態の内的時間構成は、「事態の類型(situation type)」と呼ばれるのに対し、外的視点から事態の時間的構成に対する捉え方は、「視点的アスペクト(viewpoint aspect)」と呼ばれる。その形式的表示について、「事態の類型」は語彙により表されるので、「語彙的アスペクト」とも呼ばれる。例えば、「ある」「走る」「死ぬ」「成長する」「叩く」は、それぞれ「状態(state)」「活動(activity)」「達成(accomplishment)」「到達(achievement)」「一回だけ(semelfactive)」という事態の類型に属する。これに対し、「視点的アスペクト(viewpoint aspect)」は、文法的形式により表されるので、「文法的アスペクト」とも呼ばれる。「文法的アスペクト」の中では、「完成相」と「非完成相」の対立は普遍的な文法的アスペクトの対立[19)]である。

---

18) 寺村(1984)で言う「三次的アスペクト」は、現代語の「一次的アスペクト」と「二次的アスペクト」とを定義した上で使用した用語である。本稿は、古代語の「一次的アスペクト」と「二次的アスペクト」を定義していないので、「三次的アスペクト」という用語を使用しないことにする。

19) 「普遍的な文法的アスペクトの対立」について、少なくとも、45種類の言語には「完成相」と「非完成相」という形式的対立がある（Dahl 1985: 69)。また、WALS（世界言語構造地図 https://wals.info/combinations/65A?iconsize=20&labels=0&v1=cF2F3F4&v2=c222222#map-container)によると、222種類の言語には、「完成相」と「非完成相」という形式的対立を持つ言語は半数(101種類）ある。

日本語のアスペクト研究も、このアスペクトの二分類に基づくものである。例えば、現代語では、「シテイル」と「φ」は、「非完成相」と「完成相」を表す文法的アスペクトである。それに対し、「死ぬ」「見る」「ある」といった各々の具体的動詞に内在する時間的意味は語彙的アスペクトである。だが、「語彙的アスペクト」と「文法的アスペクト」の他に、第三類のアスペクトも存在する。例えば、上で述べたように、寺村(1984: 164)は、事態の局面的意味を表すものを「三次的アスペクト」と呼んでいる。さらに、工藤(1995: 68)は、この寺村(1984)に基づき、アスペクトの三分類を(7)のように提示している。

(7) アスペクト的意味の記述にあたって、少なくとも次の三つのレベル—inflectional, derivational, lexical—を区別しなければならない。

a. スル—シテイルの最も抽象化された文法的対立。テクスト構成的機能をもつ、他の出来事との外的な時間的関係の中で解釈的に捉えられる、運動の内的な時間的展開のすがたの違い。

b. シハジメル（シダス)、シツヅケル、シオワル（シヤメル）に代表される派生動詞の系列。運動内部の時間的展開段階の客観的な違い。

c. 動詞の語彙的意味の中にある時間的性質。　工藤(1995: 68)

工藤(1995)が指摘している(7a)と(7c)は、それぞれ「文法的アスペクト」と「語彙的アスペクト」として理解し得るが、(7b)は、本稿で言う「局面的アスペクト」として理解するのが適当である。工藤(1995)は、「完成相」と「非完成相」という文法的アスペクトと動詞の語彙に内在する時間的意味、即ち語彙的アスペクトの他に、第三類のアスペクトの存在のみを提示しているが、その研究は、主に文法的アスペクトと語彙的アスペクトを中心に行ったものであり、この第三類のアスペクトがどのような性質を持つのか、他類のアスペクトとどのような違いがあるのか、また、どのような用語でこの第三類のアスペクトを表示すればよいのか、といった問題を検討していない。以下では、残された問題を検討した上で、「ツ・ヌ」は第三類のアスペクト、即ち「局面的アスペクト」であるや否やということを検証する。

「局面的アスペクト」は、「語彙的アスペクト」と「文法的アスペクト」と区別される、第三類のアスペクトである。「局面(phase)」とは、事態の時間的構成の一局面である。例えば、動作の発生(inceptive)、一時的持続(short duration)、動作の反復(iterative)といった時間的区分は事態の「局面」である。このような「局面」は、通常は接辞により表示されるが、分析的形式(analytic)により表示されることもある(Binnick 1991: 202)。例えば、現代語の局面動詞「V1＋始める」「V1＋終わる」は、分析的形式により表示される「局面的アスペクト」である。

「局面的アスペクト」と「文法的アスペクト」との違いについて、「文法的アスペクト」は、

事態の内的時間構成に対する捉え方である。つまり、「文法的アスペクト」は、事態の内的時間構成における一局面、或いは、その「ひとまとまり」を、外的視点から捉えるものであり、この外的視点は、文法的形式（通常は接辞）により表示される。「完成相」は、外的視点から事態の「ひとまとまり性」を捉える文法的アスペクトであるが、「非完成相」は、事態の内的時間構成における進行（持続）的局面のみを捉える文法的アスペクトである。例えば、それは図 1 のように示すことができる。

（事態の「ひとまとまり」を捉える「完成相」）

（事態の〈進行〉局面のみを捉える「非完成相」）

図 1　文法的アスペクト（「完成相」と「非完成相」）の視点

それに対し、「局面的アスペクト」は、外的視点と関わらず、事態が〈発生〉〈進行･持続〉、或いは、〈完了〉といういずれかの局面にあることを表すアスペクトである。例えば、それは図 2 のように示すことができる。

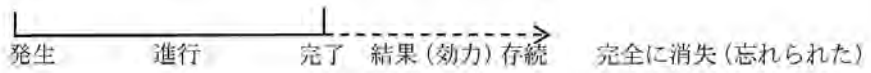

図 2　外的視点と関わらない、事態自体の局面（局面的アスペクト）

「局面的アスペクト」と「語彙的アスペクト」との違いについては、「語彙的アスペクト」は事態に内在する時間的構成を明瞭に表すのに対し、「局面的アスペクト」は事態に内在する時間的構成の一局面のみを表している。しかも、一つの局面から、それと隣接的局面を推論（entailment）できる。例えば、時点（A1）を時点（A2）の前にある時点（A1<A2）に設定すると、〈発生〉〈進行〉〈完了〉という各局面における推論的関係は表 7 のようになる。

表 7　Plungian（1999）に基づく各局面における推論的関係

	A1	A2
発生	-	+
進行	+	+
完了	+	-
まだ発生していない	-	-

表 7 で示されているように、前の時点（A1）に存在せず、後の時点（A2）に存在する局面は〈発生〉であり、A1と A2の時点に共に存在する局面は〈進行〉である。また、A1の時点に存在したが、A2の時点に消えた局面は〈完了〉である。A1と A2の何れの時点にも存在しない局面は「まだ発生していない」である。ただし、「まだ発生していない」という局面は通常は専用の言語表現がない。このように考えると、局面の間には、〈発生＞進行＞完了＞（再）発生〉というような推論的関係があると理解し得る。それに対し、「状態」から「動作」を推論できないように、一種の「語彙的アスペクト」から他の「語彙的アスペクト」を推論することはできない。

また、「局面的アスペクト」は、「完成相」と「非完成相」とのような「文法的アスペクト」と重層構造になり得る。「完成相」と「非完成相」は、対立的関係を有するので、「完成相」を表す文法的形態素と「非完成相」を表す文法的形態素が共起し難い。例えば、現代中国語では、「非完成相」は、接尾辞の「着［tʂə］」により表示されるのに対し、「完成相」は、接尾辞の「了［lɤ］」により表示される。「非完成相」を表す「着」と「完成相」を表す「了」は共起すると非文となる。

(8) * 下午　三点＝到　五点，我　一直　<u>读 - 着 - 了</u>　书。
　　* 午後　三時＝まで　五時、私　ずっと　<u>読む - 非完成相 - 完成相</u>　本。
　　* 午後の三時（から）五時まで、私はずっと本を読む、でいる。

また、中国語と同じように、現代日本語においても、「完成相」と「非完成相」が対立的な文法的アスペクトであるため、重層構造になることは見られない。それに対し、「局面的アスペクト」は「完成相」と「非完成相」という「文法的アスペクト」と重層構造になることが見られる。例えば、

(9) 雪が<u>降り始めている</u>。　寺村（1984: 171）

(9)の下線部では、「降り始め」は、「降ることの始まり」を表す「局面的アスペクト」であり、「文法的アスペクト」の「シテイル」は、「降り始めた」という変化の結果の存続を表している。つまり、「局面的アスペクト」の「V1＋始める」は、「文法的アスペクト」としての「シテイル」と重層構造となる。

以上をまとめると、「局面的アスペクト」は、以下の特性があると言える[20]。

[20] 通時的視点から見ると、「局面的アスペクト」は、語彙的アスペクトと文法的アスペクトと通時的関係を持つ。つまり、「局面的アスペクト」は語彙から文法への変遷の中間位置にある。文法化の度合いが深まるにつれて、「局面的アスペクト」は、文法的アスペクト、或いは、テンスに再分析される可能性

(10) a. 意味から見ると、「局面的アスペクト」は、〈発生〉〈進行〉〈完了〉という時間的局面を表すものである。異なった局面的意味を表す「局面的アスペクト」には、推論的関係がある。

b. 形式から見ると、「局面的アスペクト」は、文法的形式（接辞）により表示されることもあれば、分析的形式（派生的形式）により表示されることもある。

c.「局面的アスペクト」は、文法的アスペクト（「完成相」と「非完成相」）と、重層構造になり得る。「完成相」と「非完成相」は、意味の矛盾により、重層構造になり得ない。

d. 局面的アスペクトは、語彙に内在する時間的意味の一局面を表すので、外的視点と関係ない。

(10)の定義を踏まえて、次節では「ツ・ヌ」を「局面的アスペクト」に位置付ける理由を説明する。

4.2 「ツ・ヌ」を「局面的アスペクト」に位置付ける理由

「ツ・ヌ」を「局面的アスペクト」に位置付けるのには、以下の理由がある。(10a)で述べたように、異なった局面的意味を表す局面的アスペクトには、推論的関係がある。例えば、中西(1957: 1)が指摘しているように、古代語の「ヌ」は、事態の〈発生〉を表すと同時に、今も発生した事態の状態にあること（即ち、発生した事態の〈進行〉と〈持続〉）も表し得る。例えば、

(11) わが待ちし秋は<u>来りぬ</u>妹と吾何事あれど紐解かざらむ。

（『万葉集』、十、二〇三六、中西(1957: 1)から引用）

(11)の下線部における「来りぬ」は、中西(1957: 1)で指摘されているように、「今、秋が来ている」という意味、即ち「事態が発生して、しかも、発話時まで持続している」という意味を表している。『竹取物語』にも類似した例が見られる。例えば、

(12) a. くらつまろうが申すやう…（中略）…この麻柱をこほちて、人みな退きて、まめならむ人一人を、荒籠に乗せ据ゑて、綱を構へて、鳥の子うまむ間に、綱を吊り上げ

がある。例えば、(Bybee et al(1994: 105)では、〈完了と方向性〉の意味を表す本動詞は、〈完了(completive)〉の局面を表す「局面的アスペクト」と「以前時（anterior)」(「パーフェクト」と同じ意味）を経由し、最終的には「完成相（perfective)」、または、「過去時（simple past)」に文法化するルートが提示されている。この通時的変遷に関しては、別稿で詳しく検討したい。

させて、ふと子安貝を取らせたまはむなむ、よかるべき」と申す。中納言のたまふやう、「いとよきことなり」とて、麻柱をこほち、人みな帰りまうで来ぬ。

（『竹取物語』「石上の中納言、燕の子安貝を取らんと計画」）

b. 船に乗りて、追風吹きて、四百余日になむ、まうで来にし。大願力にや。難波より、昨日なむ都にまうで来つる。さらに、潮に濡れたる衣だに脱ぎかへなでなむ、こちまうで来つる」とのたまへば、翁、聞きて、うち嘆きてよめる、…

（『竹取物語』「くらもちの皇子、偽りの苦労談を語る」）

（12）における「まうで来ぬ」（12a）と「まうで来つる」（12b）は、対立するペアとなる。（12a）は、「人が多くなると、燕が寄ってこなく、一人の忠実な家来のみを残し、余計な人を退かせる」というくらつまろうの建言を聞いて、余計な家来が「みんな、お宅に帰る」という意味を表している。この「帰りまうで来ぬ」からは、余計な家来が発話時に自宅に到着したか否かは分からず、中納言の目の前、即ち燕の子安の貝を取る現場から家来が離れたという意味のみが理解できる。つまり、「つまり、動作の〈発生〉を表すと同時に、発話時に帰る途中にあるという〈進行・持続〉の意味が潜んでいる。（12a）と対照となる（12b）の「まうで来つる」は、「昨日、都に到着した」という意味を表し、発話時に動作主（前の文脈での「くらもちの皇子」）が竹取の翁の目の前にあるので、「まうで来」という動作の〈完了〉を表している。この問題について鈴木（2009）では、「ヌ」にパーフェクト性があるので、「発生」の意味の他に、「持続（進行）」の意味も表し得ると解釈されている。だが、「ヌ」を、〈発生〉を表す「局面的アスペクト」として理解すると、そこに潜む「進行」の意味は、パーフェクト性と関係せず、むしろ〈発生〉という局面から推論した意味となる。

また、（10b）で述べた「局面的アスペクト」の形式的表示から見ると、現代語の「局面的アスペクト」は、「V1＋局面動詞（始める、終わる）」という分析的形式により表示される。だが、通言語的視点から見ると、「局面的アスペクト」は、必ずしも分析的形式、或いは、派生的形式（derivational）により表示されるとは限らない。例えば、Bybee et all（1994: 60）が指摘しているように、カー語[21]では、屈折接辞「-n」は、方向性の意味を表すと同時に、〈完了〉という局面の意味も表し得る。つまり、形式的表示の違いは、「局面的アスペクト」であるか否かを判断する基準ではない。現代日本語の「局面的アスペクト」は、確かに分析的形式により表示されるが、古代語の場合では、「ツ・ヌ」は、それぞれ本動詞の「棄（う）つ」と「往（い）ぬ」という動きの方向を表す本動詞から転成したことが推定されている（大野・佐竹・前田1976: 1432）。文法化の過程では、「棄つ」と「往ぬ」の始めの母音が脱落し、接辞の「ツ・ヌ」が形成した。このように考えると、古代語における、〈発生〉と〈完了〉と

[21] カー語（car）は、オーストロアジア語族（Austroasiatic languages）に属する、インドのニコバル諸島で話される言語である。

いう局面的アスペクトは、現代語の分析的形式と異なり、接辞により表示されるものである。例えば、

(13) a. この衣着つる人は、物思ひなくなりにければ、車に乗りて、百人ばかり天人具して、のぼりぬ。その後、翁、嫗、血の涙を流して惑へど、かひなし。
(『竹取物語』迎えの天人来たり、かぐや姫昇天)

b. この天の羽衣を着た人は、物思いが消滅してしまうので、そのまま飛ぶ車に乗って、百人ぐらいの天人を引き連れて、月の世界へ登り始めた。その後、翁と嫗は血の涙を流して、思い乱れても、どうにも仕方がない。 ((13a)の現代語訳)

(13a)は、百人の天人が飛ぶ車に乗って、月の方向へ出発したという様子を描いている。下線部の「のぼりぬ」は、月に到着したという意味ではなく、現場(地上の竹取の翁の家)から離れるということを示しており、動作「登る」の〈発生〉を表している。これは現代語で示した(13b)の「登り始めた」という表現に相当する。(13a)の「のぼりぬ」と(13b)の「登り始めた」は、共に〈発生〉という局面的意味を表す「局面的アスペクト」であるが、現代語では、「V1+始める」という分析的形式により表示されるのに対し、古代語では、接辞の「ヌ」により表示される。

さらに、(10c)で述べた、「局面的アスペクト」と「完成相」「非完成相」との重層構造については、「完成相」と「非完成相」は、対立的な文法的アスペクトであるため、完成相標識の存否は、非完成相標識の存否に依存する。言い換えれば、対立するものに対して、一方が存在しなければ、他の一方も存在できず、対立関係が瓦解することになる。つまり、「完成相」と「非完成相」を論ずる場合では、両者を別個に論ずることができない。通言語的視点から見ると、「完成相」を表す文法的形態素と「非完成相」を表す文法的形態素が共起することは見られない。この前提を踏まえて、もし鈴木(2009)の指摘通りに「ツ・ヌ」を古代語の完成相標識に位置付けると、これと対立する、古代語の非完成相標識も必ずあると推定できる。だが、古代語には、広義の非完成相標識[22]がない。確かに、古代語では、非完成相

[22] 現代語の「シテイル」は、「歩く、走る」のような「持続・動作動詞(非限界動詞)」に承接すると、〈動作の進行〉という「非完成相」の意味のみを表す。また、「来る、行く、落ちる」のような「持続・変化動詞(限界動詞)」に承接すると、〈動作の進行〉という「非完成相」の意味と、〈結果の存続〉という「結果相」の意味を共に表し得る。ただし、「死ぬ」のような「瞬間・変化動詞(瞬間的限界動詞」に承接すると、〈結果の存続〉という「結果相」の意味のみを表す。つまり、現代語の「シテイル」は、「変化動詞」と「動作動詞」の何れの〈進行・持続〉を表すことができることから、広義的な非完成相標識であると言える。一方、古代語の「タリ」は、「動作動詞」の〈進行・持続〉のみを表し、「変化動詞」に承接すると、「結果の存続」の意味となる。また、一部分の動詞基本形「ϕ」は、〈進行・持続〉という「非完成相」の意味を表し得るが、他には、「完成相」の意味を表す「ϕ」も存在する。このことから、古代語には、現代語の「シテイル」のような、「広義」な非完成相標識がないと思われる。

の意味を表す場合、「タリ」と「φ」が用いられるが、金水（1995）の指摘によると、「タリ」は、非限界動詞の非完成相（弱進行）のみを表し、限界動詞に承接すると、「結果の存続」の意味となる。それに対し、古代語の「φ」は、「完成相」を表すこともあれば、「非完成相」を表すこともあるので、「中立相」（高山・青木2010: 50）とも呼ばれる。このように考えると、古代語における「タリ」と「φ」の何れでも、一部分の述語で「非完成相」を表し得るので、広義的な意味において、非完成相標識とは言えない。このことから、古代語には、広義的な非完成相標識がないことになり、完成相標識もないと判断することができる。

また、もし「ツ・ヌ」は、古代語の完成相標識であれば、「非完成相」の意味を表す「タリ」と共起できないと推測できる。だが、古代語では、「ツ・ヌ」は「タリ」と、重層構造になり得る。例えば、井島（2011: 166）が指摘しているように、『源氏物語』には、「たりつ」が42例、「たりぬ」が1例、「に（ぬ）たり」が186例見られる[23]。『竹取物語』には、（14c）のような「に（ぬ）たり」の例も見られる。

（14）a. かの家にも隠ろへては据ゑたりぬべけれど、しか隠ろへたらむをいとほしと思ひて、かくあつかふに、年ごろかたはら避らず、明け暮れ見ならひて、かたみに心細くわりなしと思へり。（『源氏物語』「東屋」）

b. 殿は、なほ、いとあへなくいみじと聞きたまふにも、心憂かりける所かな、鬼などや住むらむ、などて、今までさる所に据ゑたりつらむ、思はずなる筋の紛れあるやうなりしも、かく放ちおきたるに心やすくて、人も言ひ犯したまふなりけむかし、と思ふにも、わがたゆく世づかぬ心のみ悔しく、御胸いたくおぼえたまふ。（『源氏物語』「蜻蛉」）

c.「汝、幼き人。いささかなる功徳を、翁つくりけるによりて、汝が助けにとて、かた時のほどとてくだししを、そこらの年ごろ、そこらの黄金賜ひて、身を変へたるがごとなりにたり。（『竹取物語』迎えの天人来たり、かぐや姫昇天）

（14）は「ツ・ヌ」と「タリ」が共起する例である。（14a）と（14b）は、「たりつ」「たりぬ」の例に対し、（14c）は「に（ぬ）たり」の例となる。（14a）と（14b）では、「タリ」は、「動作動詞（非限界動詞）」の「据う」に承接するので、「住んでいる」という〈進行・持続〉の意味を表している。もし「ツ・ヌ」を、事態の「ひとまとまり性」を表す完成相標識として考えると、「ツ・ヌ」は、「据ゑたり」との意味は矛盾する。だが、ここでは、「ツ・ヌ」と「タリ」は共起しているので、その意味は矛盾しない。このように考えると、「ツ・ヌ」は、〈進行・持続〉の意味を表す「タリ」と対立する完成相標識ではないと思われる。（14a）は、浮

[23] ただし、「て（つ）たり」の例は見られない。

舟の母（中将の君）が浮舟を三条の小家に預ける時の内面描写である。具体的に言うと、娘（浮舟）を預けるところ（三条の小家）から帰ろうとする時、娘の可哀想な様子を見て生じた内面的心理を表している。この内面描写を現代語に訳すと、「（浮舟）を、この邸内に人目をつかぬように住まわせておこうと思えば、できないことでもなかったのだろうけれど、そんなふうに忍ばせておくのを不憫に思って、このように取り計らうわけなのだが、長年の間そばから離さず朝に晩に顔を合わせてきたのだから、お互いにたまらなく心細い気持ちになっている」（小学館古典文学全集・『源氏物語』p.79）となる。下線部の「据ゑたりぬ」は、浮舟が三条の小家に住んでいるという状態の〈発生〉（この後も、浮舟がこの家に引き続き住んでいる）を表している。（14b）は、「（薫は浮舟の死を知って）、なんと厭わしい宇治の地であることか。鬼でも住んでいるのだろうか。どうして今まであのような所にあの女（浮舟）を住まわせていたのだろう」（小学館古典文学全集・『源氏物語』p.215）という薫の後悔を表している。「浮舟」は、発話時には、既に死んでいるが、「据ゑたり」は「過去時において浮舟の住んでいる状態」を表しており、「つ」は、「住む状態」の〈完了〉、即ち「住む状態」の「非存在」を表している。さらに、（14c）は、「竹取の翁は、かぐや姫を養うことにより、金持の人になり、しかも、今も金持ちの人である」を表すので、「なりにたり」は、「貧乏な人から金持ちの人に変化した後も、その結果が発話時まで存続している」という意味を表しており、「にたり」は、「まず変化して、しかも、変化の結果が存続する」ということを表している。このように、「たりつ」「たりぬ」「に（ぬ）たり」という「ツ・ヌ」と「タリ」が相互的に承接する場合では、その意味は、「たり」と「ツ・ヌ」の順により決定される。つまり、「たりつ」「たりぬ」のような、「タリ」が前に置かれた場合では、「ツ・ヌ」は、第3.2節で述べた状態述語に承接したものと同じように、前接の「タリ」により表示された動作の〈進行･持続〉状態の〈完了〉と〈発生〉の局面的意味を表している。これに対し、「に（ぬ）たり」のような、「タリ」が後に置かれた場合では、「ツ・ヌ」は、前接動詞の〈完了〉、或いは、〈発生〉の局面的意味を表し、「タリ」は、「ツ･ヌ」により表示された〈完了〉と〈発生〉という変化の〈存続〉を表している。つまり、（14a）と（14b）における「タリ」+「ツ･ヌ」は、〈進行･存続〉+〈完了〉〈発生〉の意味を表し、（14c）における「ヌ（に）」+「タリ」は、〈発生〉+〈進行・存続〉を表している。「ツ・ヌ」が〈進行・存続〉という「非完成相」の意味を表す「タリ」と重層構造になることから、「ツ・ヌ」を「非完成相」と対立する「完成相」に位置付けることは難しいと思われる。

最後に、（10d）で述べたように、局面的アスペクトは、外的視点と関係せず、語彙に内在する時間的意味の一局面を表すものである。状態の内的時間構成は未分化であり、外的視点から状態を捉えることが不可能である。「ツ・ヌ」は、状態述語に承接できるので、外的視点から事態を捉える文法的アスペクトではない。状態述語に承接する「ツ・ヌ」の具体例について、第１節の（1）と第3.2節の（5）と（6）で示したものの他に、（15）の例も見られる。

(15) 内侍、「…国王の仰せごとを、まさに世にすみたまはむ人の、うけたまはりたまはでありなむや。」　（『竹取物語』帝、かぐや姫召さんとして手紙をつくす）

(15)の下線部における「ありなむ」は、非現実世界に国王の命令に背く人が現れたことを仮定し、物語の現実世界にはそのような人が存在しないという意味を含意している。つまり、この「ぬ（な）」は、非現実世界における存在状態の〈発生〉を表している。状態は、あまり変化せず、恒常的なものであり、話者自身は、発話の時にこの状態の中に存在するので、状態外の視点から状態の「ひとまとまり性」を捉えることは不可能であろう。このように考えると、「ツ・ヌ」は、「完成相」の意味を表し得ず、状態に内在する〈完了〉と〈発生〉の局面を表すものであると理解し得る。

以上の検討から、「ツ・ヌ」を古代語の「局面的アスペクト」に位置付けることができると思われる。

5. 終わりに

本稿は、『竹取物語』を通して、「ツ・ヌ」のアスペクト的意味とアスペクト的位置付けを再検討した。「ツ」については、「主体動作客体変化動詞」に承接する「ツ」が多く、「動作動詞」「持続的変化動詞」と「思想動詞」に承接する「ツ」も見られた。ただし、「瞬間的変化動詞」に承接する「ツ」は見られなかった。その一方、「ヌ」については、「変化動詞」に承接する「ヌ」が圧倒的に多く、「動作動詞」に承接する「ヌ」が基本的には見られなかった。「変化動詞」の他に、「主体動作客体変化動詞」「思想動詞」に承接する「ヌ」も僅かに見られたが、「主体動作客体変化動詞」に承接する場合、「ヌ」は、主体動作の発生を表さず、客体変化の〈発生〉を表す。また、動態述語の他に、「ツ・ヌ」は、共に状態述語（「状態動詞」「形容詞」）に承接することがある。

古代語の「ツ・ヌ」のアスペクト的位置付けについては、「ツ・ヌ」は、事態の「ひとまとまり」を捉える視点というより、〈完了〉と〈発生〉という事態の局面を表すというのが適当であると言える。特に〈発生〉から〈進行〉の意味が推論できるので、〈発生〉を表す「ヌ」には〈進行〉の意味も潜む。また、『竹取物語』と『源氏物語』には、「非完成相」の意味を表す「タリ」と重層構造になり得る「ツ・ヌ」が見られた。「ツ・ヌ」は、「非完成相」の意味を表す「タリ」と重層構造になり得るので、「非完成相」と対立する「完成相」に位置付けることが難しい。従って、本稿は、古代語の「ツ・ヌ」を、外的視点から事態の「ひとまとまり」を捉える「完成相」標識に位置付けず、語彙の時間的意味に内在する〈完了〉と〈発生〉という局面的意味を表す「局面的アスペクト」の接辞として位置付けた。

一次資料・原典

日本古典文学全集（小学館）『竹取物語』『源氏物語』
日本語歴史コーパス（CHJ）https://chunagon.ninjal.ac.jp/chj/search

参考文献

井島正博（2011）『古代語過去・完了表現の研究』東京，ひつじ書房.
大野晋・佐竹昭広・前田金五郎（1974）『岩波古語辞典』東京，岩波書店.
奥田靖雄（1977）「アスペクトの研究をめぐって：金田一的段階.」奥田靖雄（編）『ことばの研究・序説』東京，むぎ書房，pp.85–106.
金水敏（1995）「「進行態」とはなにか」」『国文学解釈と鑑賞』60（7），pp.14–20.
工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト：現代日本語の時間の表現』東京，ひつじ書房.
工藤真由美（2014）『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』東京，ひつじ書房.
鈴木泰（2002）「古代日本語における完成相非過去形（ツ・ヌ形）の意味」『国語と国文学』79（8），pp.49–62.
鈴木泰（2009）『古代日本語時間表現の形態論的研究』東京，ひつじ書房.
高山善行・青木博史（2010）『ガイドブック日本語文法史』東京，ひつじ書房.
寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味（第Ⅱ巻）』東京，くろしお出版.
時枝誠紀（2020）『日本文法　口語篇・文語篇』東京，講談社学術文庫.
中西一宇（1957）「発生と完了：「ぬ」と「つ」」『国語国文』26（8），pp.509–525.
Binnick, Robert I. 1991. *Time and Verbs: A Guide to Tense and Aspect*. Oxford: Oxford University Press.
Bybee, Joan. William Perkins. & Revere Pagliuca. 1994. *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in Language of the World*. Chicago: The University of Chicago Press.
Comrie, Bernard. 1976. *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.
Dahl, Östen. 1985. *Tense and Aspect Systems* : Oxford: Basil Blackwell.
Plungian, Vladimir A. 1999. “A typology of phasal meaning”. In *Tense-Aspect, Transivity and Causativity* edited by Abraham, Werner & Kulikov, Leonid. Amsterdam: John Benjamins. pp. 312–321.
Smith, Carlota. 1997. *The Parameter of Aspect*（2nd ed）. Dordrecht: Kluwer.
Vendler, Zeno. 1957. “Verbs and Times”. *The Philosophical Review* 66（2）. pp. 143–160.